

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32606

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13371

研究課題名（和文）墓誌史料よりみた7・8世紀の新羅・唐の人的交流の実態

研究課題名（英文）A Study of the Interaction between Silla and Tang in the 7-8th Century by Analyzing Epitaphs

研究代表者

植田 喜兵成智（Ueda, Kiheinarichika）

学習院大学・付置研究所・研究員

研究者番号：50804407

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、7～8世紀にかけて朝鮮および中国の両領域で活動した人物の墓誌史料を主に駆使して、当時の東アジアにおける両国間の人的交流の実態を追究することであった。当時の激変する新羅・唐関係のなかで朝鮮半島と中国大陸において人の移動が多数発生した。そこで、彼らに関する墓誌などの出土史料を駆使しつつ、新羅・唐間における人的交流の実態を解明することで、両国関係を東アジアの歴史上どのように把握すべきかを提示できると考えたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の一國史的な観点から見たとき、百濟・高句麗遺民や往来唐人、および熊津都督府、安東都護府は、朝鮮史研究において周縁的なテーマであった。逆にこれらを主題に置いて研究することで、新たな世界視野の歴史像を提供する点に学術的意義がある。また、本研究の成果は、現在にも影響を及ぼしている東アジアにおける朝鮮半島と中国大陸との関係を考えるうえで重要な知見を提供するものであり、その点に社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the human exchange between Korea and China in East Asia during the 7th and 8th centuries, mainly through historical records of the epitaphs of people who served for Silla and Tang dynasties during this period. Many human migrations or diasporas occurred between Korea and China at that time. This project focuses on the actual situation of human exchange between the Silla and Tang dynasties, using their epitaphs to understand how the relationship between the two regions should be understood in the history of East Asia.

研究分野：朝鮮古代史

キーワード：東アジア 金石文 墓誌 朝鮮 中国

1. 研究開始当初の背景

7～8世紀にかけて新羅・唐関係は大きく変化した。この激変する新羅・唐関係を再検討するためには、東アジアの広い視野をもちつつ、人的交流のような個別具体的なことがらの分析が必要となると考えた。当時、朝鮮半島と中国大陸において人の移動が多数発生している。たとえば、百済・高句麗の遺民、唐から朝鮮半島に派遣された往来唐人、新羅から唐へ渡った宿衛新羅人などのことである。このような人的交流の実像は、従来、史料の不足から検討が困難であったが、近年、墓誌史料の出土が増加し、その実像を追究できるようになりつつある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、7～8世紀にかけて朝鮮および中国の両領域で活動した人物の墓誌史料を主に駆使して、当時の東アジアにおける両国間の人的交流の実態を追究することであった。当時の激変する新羅・唐関係のなかで朝鮮半島と中国大陸において人の移動が多数発生した。まず百済・高句麗の遺民たちがいた。彼らは故国の滅亡後、新羅、唐、日本、突厥などに属し、それぞれの国家や社会で活動した。また往来唐人は、戦争に従軍した将兵、あるいは外交使節、あるいは羈縻州の官吏として起用された者たちである。一方、宿衛新羅人は、新羅・唐間の交流において政治・文化面で重要な役割を果たしていた。そこで、彼らに関する墓誌などの出土史料を駆使しつつ、新羅・唐間における人的交流の実態を解明することで、両国関係を東アジアの歴史上どのように把握すべきかを提示できると考えたものである。

3. 研究の方法

上述した研究目的を達成するために、次の3つの作業を通じて研究を推進した。

(1) 往来唐人関連史料の分類・整理

往来唐人は、征討軍などの軍事行動に従事した人物、熊津都督府・安東都護府などの羈縻州の官吏として関与した人物、外交使者として派遣された人物に分類することが可能である。こうした往来唐人の墓誌については基礎的な整理が行われ、現在200点前後確認されているが、個別の史料の詳細な検討はいまだ十分ではない。そこで、新出墓誌も含めて分類しつつ、具体的な史料の検討を進めた。

(2) 宿衛新羅人の活動とその役割の分析

宿衛新羅人とは、新羅の王族・貴族階層出身で、唐に派遣されて皇帝近侍の武官職を与えられ、中国に逗留した新羅人である。彼らは一方では留学生という役割をもっていたが、他方では唐に対する人質や、あるいは外交官としての役割を担っていた。そこで、本研究では宿衛新羅人に焦点をあて、彼らの活動とその役割の変化を明らかにすることを目指した。

(3) 熊津都督府・安東都護府などの羈縻州の実態解明

唐は、百済旧領に熊津都督府を、高句麗旧領に安東都護府を設置して羈縻州に編入した。現地の有力者の遺民を羈縻州の官吏として起用し、一方で唐からも官吏を派遣することで、新領土と遺民を統治しようとした。しかし、官府の移動や行政区画の改廃などが多く行われ、両羈縻州の沿革や実態については曖昧模糊としている。そこで本研究では、墓誌を活用することで、都督府・都護府に派遣された唐人と、そこで起用された遺民の経歴から羈縻州の沿革や運用実態を詳らかにしようとした。

4. 研究成果

上述した3つの研究方法に基づいて、以下のような研究成果をあげることができた。なお、Covid-19の影響によって海外渡航制限されていたため、当初予定していた現地調査がほとんど行えなかったことを付言しておく。

(1) 往来唐人関連史料の分類・整理

往来唐人に関する墓誌史料の整理と検討を行った。史料の整理と検討をすすめるため、現地調査が不可能であったことから、中国等で刊行された資料集を活用した。そうした唐人墓誌を分析した成果の一部として、『新羅・唐関係と百済・高句麗遺民 古代東アジア国際関係の変化と再編』(山川出版社、2022年)を刊行した。本書は、(3)の百済・高句麗遺民とも関わる成果も含まれている。7世紀から8世紀前半の東アジア情勢を人の移動から捉えた点に特色がある。新羅が唐との関係をどのように構築し、いかに百済・高句麗遺民を自らの領域に統合したのかを明らかにし、東アジア史の観点から新羅の三国統一といわれる国家統合過程の歴史的意義を提示した。

墓誌以外の史料を検討したものとして、『三国史記』所載の薛仁貴と文武王の書状に注目した分析を行った。薛仁貴は、新羅を攻撃するために唐から派遣された将軍であり、往来唐人の一類型である。当該の書状の分析を通じて、新羅・唐間の紛争の原因が高句麗遺民をめぐる紛争であったことを確認すると同時に、その問題を新羅側が意図的に唐と争点化することを避けており、対立を修復しようとして企図していたことを明らかにした。この成果は、「670年代の新羅と唐の対立と疎通 薛仁貴・文武王書状の分析を中心に」として2022人文国際学術週間国際学術大会「疎通の人文学」にて口頭発表し、2023年6月刊行予定の『嶺南学』85号(韓国・慶北大学校嶺南文化研究院刊)に掲載される予定である。

また、韓国学中央研究院およびソウル大学校に所蔵されている往来唐人に関連する拓本を調査することができた。特に熊津都督府と関連して、百済を征討した唐軍の記録である唐平百済碑、唐劉仁願紀功碑などを調査し、新たな判読文を作成できた。

(2) 宿衛新羅人の活動とその役割の分析

宿衛新羅人の金仁問の碑文を検討することと関連して、同時代のものと推定される碑文の文武王碑を検討する必要性が生じた。金仁問碑は、摩滅がはげしく、判読できる文字にかぎりがあ

り、単体では解読に困難があることが判明した。ところが、類似の表現や関連する記載が文武王碑にあり、これらの碑文の解読を優先して進めるべきことに気付いたためである。文武王碑については、ソウル大学中央図書館に所蔵する文武王碑拓本に対する調査を行い、新たな判読文を作成できた。文武王碑を通じて、7世紀末から8世紀初めの新羅と唐の関係が再形成されていく過程を追跡することができた。その成果は、「文武王碑にみえる新羅の国際認識」として第23回遼金西夏史研究会大会にて口頭発表した。今後は関連する史料を再度検討して論文としての完成を目指す。

また、新羅と唐の文化交流に関連して、則天文字の記された史料を分析し、唐からもたらされた仏教経典などの影響があったことを指摘し、当時の交流の様相の一端を明らかにできた。この成果は、「東アジアにおける則天文字の使用と受容の状況 中代・下代新羅文字資料に対する分析を中心に」を2020年度の中国文化大学東亜学国際学術論壇にて口頭発表した。

(3) 熊津都督府・安東都護府などの羈縻州の実態解明

熊津都督府・安東都護府に関連する百済・高句麗遺民の墓誌史料を中心に分析した。これらの墓誌史料を整理し、各墓誌の判読文と翻訳文を作成した。その成果の一部として論文「内臣之番」としての百済・高句麗遺民 - 武周期から玄宗開元期に至るまでの遺民の様相とその変化」(『高句麗渤海研究』64, 2019)を発表した。安東都護府下にあった高句麗遺民の家門の動向を追究するため、高欽徳・高遠望親子の墓誌を検討した。その成果は、「高欽徳墓誌にみえる「渤海」と「建安州都督」の意味」を『東アジアにおける朝鮮史の展望』(汲古書院、2023年3月)として発表した。

またそのほかにも安東都護府に関連する高句麗遺民を分析し、「高句麗遺民墓誌研究の動向と争点」(古畑徹編『高句麗・渤海史の射程』汲古書院、2022年2月)においては、最新の高句麗遺民墓誌の研究とその問題点を整理すると同時に、安東都護府と関連する高句麗遺民の動向が突厥、契丹の動向ともあわせて検討する必要性のあることを指摘した。唐に所属した高句麗遺民についても、墓誌に記された祖先の叙述方法に注目して、7世紀中盤から8世紀中盤の100年間に高句麗遺民にどのような変化があったのかを明らかにし、“The Genealogy in the Koguryo Diaspora’s Epitaph.”を『International Journal of Korean History』27-2に発表することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 植田喜兵成智	4. 巻 120
2. 論文標題 日本学界の『翰苑』研究の動向と課題—7世紀資料として活用するための試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 白山学報	6. 最初と最後の頁 179-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植田喜兵成智	4. 巻 64
2. 論文標題 '内臣之蕃'としての百済・高句麗遺民 - 武周期から玄宗開元期に至るまでの遺民の様相と其の変化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高句麗渤海研究	6. 最初と最後の頁 229-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ueda Kiheinarichika	4. 巻 27
2. 論文標題 The Genealogy in the Kogury? Diaspora's Epitaph	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Korean History	6. 最初と最後の頁 31~72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22372/ijkh.2022.27.2.31	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 近年の高句麗遺民墓誌に関する研究動向
3. 学会等名 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 在唐高句麗遺民の祖先叙述類型とその変化
3. 学会等名 朝鮮史研究会関東部会1月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 東アジアにおける則天文字の使用と受容の状況 中代・下代新羅文字資料に対する分析を中心に
3. 学会等名 中国文化大学東亜学国際學術論壇「漢字文化於東亜地区的傳播及受納的動態」部会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 日本学界の『翰苑』研究の動向と課題 7世紀資料として活用するための試論
3. 学会等名 學術會議「日本所在唐代類書、『翰苑』蕃夷部の総合的検討」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 670年代の新羅と唐の対立と疎通 薛仁貴・文武王書状の分析を中心に
3. 学会等名 2022人文国際學術週間国際學術大会「疎通の人文学」（Humanities of Communication）<慶北大学校人文大学主催>（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 文武王碑にみえる新羅の国際認識
3. 学会等名 第23回遼金西夏史研究会大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 植田 喜兵成智	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 368
3. 書名 新羅・唐関係と百済・高句麗遺民	

1. 著者名 古畑徹編著 中澤寛将・中村亜希子・井上直樹・植田喜兵成智・村井恭子・渡辺健哉著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 252
3. 書名 高句麗・渤海史の射程	

1. 著者名 李仁在編、権純弘・王志剛・ベクタハ・キムガンフン・井上直樹・植田喜兵成智・金秀真・赤羽目匡由・潘博星・孫昊・オジンソク・李龍彬・李廷斌・鄭京日・イジュンソン著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ヘアン	5. 総ページ数 552
3. 書名 境界を越える高句麗・渤海史研究	

1. 著者名 李成市先生退職記念論集編集委員会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 432
3. 書名 東アジアにおける朝鮮史の展望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------